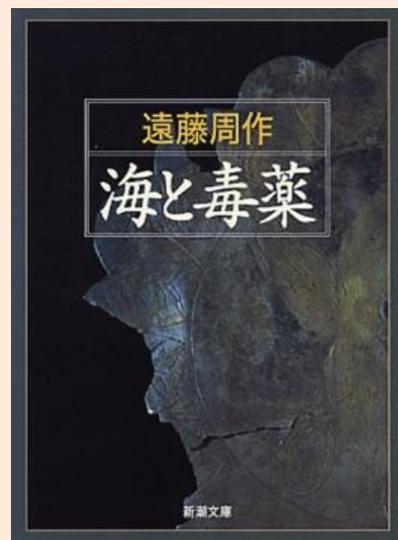


『海と毒薬』 新潮社
遠藤 周作／著

気胸を患う私が転居した田舎町には、無愛想でどこか陰のある医者・勝呂がいた。腕は確かなのに田舎の町医者に甘んじていることを不思議に感じていると、知人から思わぬ過去を聞かされる。そこで古い新聞を調べてみると、戦時中に行われた人体実験の記事があった。



太平洋戦争中、実際に九州帝大で捕虜となった米兵が臨床実験の被験者とされた事件を題材にした小説。軍部の命令によるものか、医学の進歩を信じたのか、倫理が欠如した人体実験に臨んだ医師の姿に、何を感じるだろうか？ 本作は昭和61（1986）年に映画化し、続編として『悲しみの歌』も発表している。